

Aさんのケース

Aさん（女性）は、1944（昭和19）年、九州地方生まれ（聞き取り時点で60歳）。両親ともにハンセン病を患った。父親は沖縄、母親は九州の出身。ふたりとも鹿児島島の星塚敬愛園に収容され、園内で結婚した。Aさんには、姉が1人いた。両親も姉もすでに亡くなっている。

Aさんは、20代のはじめ頃に結婚するが、40歳頃に離婚。すでに成人している男の子どもが2人いる。

灰色のトラックが母を連れて行った

Aさんの人生の最初の記憶は、4歳のときのあるシーンから始まる。Aさんは、開口一番、つぎのように語りだした。

《Aさん》わたしの記憶のいちばんの最初は、昭和23年、あとでわかったのは、6月でした。じぶんは、夏の服装をしてたなっていうのを、覚えています。とつぜん、灰色のトラックがきて、わたしの前に止まって。……母親がトラックの上から、わたしの名前を呼びながら泣いてたんですよ。その前後が記憶にないけど、やっぱり、連れて行かれるというのはわかってたんでしょう。「母ちゃん、行かんでえ、行かんでえ」って泣き叫んでました。で、ずっとトラックが〔出て〕、母親は泣きながら別れて。そこには何人か乗ってたんですよ。後ろからはあちゃんが、「あとから連れて行くから、連れて行くからね」って、泣きながら〔わたしを〕抱きしめてたっていうのが、人生の最初の記憶ですね。

最近になって、Aさんは、両親のことについて、いろいろと調べたという。

《Aさん》遡りますが、昭和13年に、母は〔星塚敬愛園に〕入ってました。父親は昭和10年です。沖縄から、100人ぐらいで、船で来たそうです。台風で、どうしようもなく、奄美大島に2泊ぐらいして。そのときに、「こういうたいへんな病気のひとが、ここに2泊もされてもらったら困る」という、すごく、圧力があつたとか。そういうときに収容されて、入ってきたひとみたいです。

で、〔園内で〕ふたりは結ばれた。……わたしの母が、「おまえのお父さんは健康なひとだったんだよ。徴兵検査で引っかかってね」っていう話を、よくしてたんですよ。わたしは、失明している父親〔をみている期間〕が長かったもんですから、やっぱり、“そんなの嘘”みたいな気持ちで、ふん、っていうような気持ちで、聞いていたんですよ。こんど、父と母をもっと知りたくて、〔昔の写真を〕見せてもらったんですよ。そうしたら、ほんとに父親の、もう、軽症の、たくましい裸の姿が〔あつた〕。その写真見て、

若々しい姿を見てですね、“ああ、これで、ふたりで逃走したのか”って。

《聞き手》逃げたの？

《Aさん》はい。昭和19年、2月に逃げてましたね。わたしが、5月に生まれてます。

《聞き手》そうか。〔脱走しないと、おなかの子どもが〕殺されちゃうからね？

《Aさん》はい。〔わたしは〕そうやって生まれた子です。

ハンセン病療養所内では、出産は認められていなかった。そのまま園内に留まっていれば、Aさんの母親は「墮胎」を強制され、Aさんはこの世に生まれていなかったことになる。Aさんからの聞き取りは、冒頭から衝撃的な事実の語りではじまった。

《Aさん》〔星塚敬愛園入所者の〕TSさんが、母をよく知ってます。「あんたのお母さんて、色の白い、かわいい人だったよ」って、いま、言ってくれるんですよ。そのまえに、〔TS〕おばちゃんは中絶されてますから、「あんたのお母さんが、産みに、逃げて帰ったとき、うらやましかったぁー」って。「あたしも〔里が沖縄でなくて〕陸続きなら……」って。

《Aさん》〔両親は〕母の田舎に帰って、なにをやるかといったら……。母のすぐ〔下の〕弟、長男は、戦争に行ってる状態。ほかの子どもというのは、学校。だから、ばあちゃんとじいちゃんが苦労してるから、母は、家が気になるんですよ。“この健康な人を連れて帰れば、家の仕事が一緒にできる”って。だから、わたしを孕んでからかどうか知らんけど、その前に〔も脱走を試みてるんです〕。父を知ってるおじさんが、「あんたのお父さん、逃走ばっかりしてた」って。福祉〔課〕で見たのは、逃走記録が何回もありました。「そのたんびに、監禁室に入れられたの？」って言うたら、〔おじさんは〕「そうさ」って。

星塚敬愛園を「脱走」したAさんの両親は、母親の実家でAさんを出産し、しばらくはそこで暮らすことができた。しかし、1948（昭和23）年6月、両親はふたたび「強制収容」された。Aさんの記憶には、トラックの上で泣く母親の姿しか存在しないが、記録では父親もこのとき一緒に収容されている。

《Aさん》昭和23年に母が強制収容されたときの〔前後の〕記憶がわたしにはないんです。ただ、母が去ってから、隠れ家みたいな小屋を、「おまえたちが住んでたところは、ここだ」って。でも、〔強制収容のとき〕そこを消毒されたために、もう、叔父が取り壊して。電気もなかったです。壊すのはもう、簡単でしたね。ほんっとの小屋でした。

こうして、Aさんは、母方の祖母に育てられることになる。

《Aさん》母には3人の弟がいます。ひとり〔＝長男〕は戦争に行き帰ってきて、そして、「自分は自活するから」ということで、違うところに行ってしまう。三男も、中学卒業したら、やっぱり、仕事行きますわね。〔2人の〕叔父は出て行く。

〔それと〕じいちゃんが亡くなるんですよ、わたしが4歳ぐらいのときに。ほんとは盲腸だったらしいんですけど、やっぱり田舎のこと、手遅れかなんかして、手術もちゃんとできなかったか、そういうことがあって。亡くなって……。

だから、ばあちゃんと、母の〔2番目の〕弟、そのときは16歳ぐらいですね。それと、わたし。姉もいっしょにいたと思うんですけど、あんまり記憶ないんですよ。

9歳年上の姉の出生にも、悲惨な秘密があった。

《Aさん》母親は、もう7歳ぐらいのとき〔から〕よく手を痛がってたって、ばあちゃんが話してくれてました。でも、治療もなにもないじゃないですか。貧乏だから、やっぱり仕事はしてたみたいです。仕事はしてたみたいですけど、思春期の頃に、やっぱり「痛い、痛い」って、離れでずうっと寝てたところに、男性が入ってきて犯してんですよ、母を。そのときに、18歳のときに産んだ子どもが、姉なんです。

敬愛園に両親を訪ねる

Aさんは、叔父に連れられて、星塚敬愛園の両親を何回か訪ねている。

《Aさん》ばあちゃんが「あとで連れて行く」と言ったけど、最初に連れて行ってくれたのは、叔父でした。その叔父は、16歳ぐらいだったんですけど、わたしを囲炉裏端で抱いてくれたり、お風呂に入れてくれたり、それはそれはかわいがってくれましたね。

敬愛園に行くときも、乗り換え乗り換えして、「ながのだ」というところで降りて、4キロぐらい歩くんですよ。その道のりを、わたしは、手を引かれて、歩ききれないんですね。したら、叔父が「疲れたか」と言って。米とモチが入ってるリュックの上に、16歳の少年が、わたしを肩車して、坂道を登って。敬愛園は、煙突が見えるのがシンボルでしたからね。「ほら、煙突が見えてきたぞ、もうすぐだ。また歩くか」と言って、手を引いて。母親のところ、叔父と何回か、そうやって行ったんです。最初に行ったときは、予防着を着て、行かされたんです。

行ったら、夫婦が3組ぐらい、おんなじ部屋にいるんですね。片隅、片隅、片隅って、もうなんか疲れたように、こう、やってるんですよ。みんな注目しますわね、みんな子どもいないんだから。なんかわたし、怖いんですよ。なんか怯えてたっというのだけ、覚えてます。

そのあとはもう、あんまり……。母と会って、話したもなにも、覚えてないの。でも、

そのときに父がいた……。 「静かにしとくんだよお」とかって言ったのを、覚えてるんです。そして、そのあとはもう、別れのシーン。あの、敬愛園は、いちおう木ですよ、まわり。でも、そのまわりは有刺鉄線が張ってありました。それは、わたし、何度か引っかかっているから覚えてるんですよ。そのあいだから、父と母が、泣きながらわたしを見送ってる。わたしは、叔父に手を引かれながら、泣きながら帰って、何度も何度も振り返り、帰った。そういう自分のシーンっていうのを、覚えてますね。

《聞き手》 小学校上がるまえに、行ってるわけね？

《Aさん》 はい。

「敬愛園に行く」と言えない自分

Aさんは、小学校6年のとき、ひとりで星塚敬愛園に行こうとして、道に迷ったことがある。そのときの体験を、つぎのように語った。

《Aさん》 敬愛園に、最初は、叔父が何回か連れてってくれて。そして、小学校に入ったら、夏休み冬休みとかに、ばあちゃんが連れて行ってくれたなっていうのは、覚えています。本館の向こう側に面会室というのがあったんです。そこに泊まって、昼間に別館で会う。

6年生ぐらいだったと思うんですけど、一人で行ったことがあるんです。「ながのだ」からの4キロの道、一人で歩いてたら、道に迷って。通りかかったバイクのおじちゃんが「どこ行くの？」って言われるから、「はあ、道迷った」。敬愛園に行くって言えないですよ、「道を迷ったみたいです」、それを先に言ってるんです。したら、「じゃあ、乗んなさい」って言って、ずうっと連れて〔いって〕。その人は気づいてたんじゃないかと思うんですよ、最初から。〔でも〕敬愛園に行くって言えなくて。“近くなった、〔あの高い煙突が〕見えたな。ここだ”って思ったら、「もういいです」って、降ろしてもらって。〔園について〕父に、「道に迷ったら、知らんおじちゃんがバイク乗せてくれた」って。「名前聞かなかったのか？」「聞かんがった」「お礼言ったのか、ちゃんと？」「うん、お礼は言ったよ」。

親切なおじさんにも「敬愛園に行く」とは言えない自分。Aさんがそうなるまでには、学校の友だちからの孤立、かわいがってくれた叔父の態度の変化といった経験の積み重ねがある。

仲間はずれ

小学校に入学する時点で、Aさんは、仲のよかった幼友だちからも引き離され、学校ではずっと仲間はずれにあう。

《A さん》わたしが小学校に入学するときには一緒に〔学校へ〕行こうと思っていた、仲良うしよった女の子がいたんですよ。そこのおばあちゃんが……。あの、その子は早生まれだったから、わたしのほうが知恵がちょっとついてたんです。だから、「あの子と一緒に行ったら、うちの子のほうが覚えが悪いのが〔目立ってしまう〕。あすこの子どもよりも、うちの孫が覚えが悪いのは、恥ずかしいことだから」って、小学校入学をずらされましたがね。

《聞き手》学年を、むこうが1年あとにした？

《A さん》はい。そこは、ずっと政治家が出て、うちの田舎では、裕福な家でした。わたしと一緒に学校に入って、「うちの子が、あんなとこの、あんな人の子に生まれた子と行くのは、恥ずかしい」っていうこととかが、やっぱりこう、伝わってくるんですよ。

《聞き手》小学校行ってるときは、やっぱり、みんなが知ってるわけ？

《A さん》親が教えるんじゃないですか。ただ、なんとなく、石コロが、わたしに向けて投げられるんですよ。

《聞き手》もうそれは、小学校1年から？

《A さん》はい。そして、麻疹（はしか）とかなるじゃないですか。学校でそんなのが見つかり、特別なことを言う。「あの人の、うつるんだ」と。「わたしのお母さんが言ってたあ」って。そして、仲間外れにするんですね。それが悲しかったです。そして、もうやっぱり、身に染みついちゃったんでしょうねえ、子どもたちが、「きのうはお母さんと、こんなあつて。先生、なんとかでえ」って言ったとき、やっぱり、わたしはしゃべらないんですよ。ほんとは、夏休み、親に会ったうれしさとか話したいんですけど、学校の先生に、絶対そこで話さないですよ。だから、いつのまにか、誰が教えるともなく、わたしは、〔病気の両親のことを口にはいけないうのが〕染みついてたんだろうと思うんですね。

《聞き手》先生の対応はどうでした？

《A さん》先生はわりと、かわいがってくれました。そして気づくんです。勉強ができれば、そんなに、いじめられないということ。小学校のときは、一生懸命聞いとけば、わかるじゃないですか。田舎の子だからみんな、成績悪いから、ほとんどトップでいけた。昔は賞状が多かったですよね。いっぱい賞状もらって。「ばあちゃん、賞状、こんなもらったよあ」って。学芸会とか、なんかわたしが目立ってたみたいなんですよ、踊り方とかそんなのが。だから、いつも主役をしてたり。

ほかの親たちも、陰では「あその子だ」とか言うんだろうけど。「コシキ」っていうんですよ、らい病のこと。「コシキか、コシキか」とか言ってました。まあやっぱり、「あその子だがあ」っていうのは、みんな知ってますよね。

姉は、その〔母たちが強制収容された〕ときに学校に行ってるから、ツバを吐きかけ

られよったそうです。姉は、そんなに成績とかも良なくて。もう、卑屈に卑屈に育っていった人ですからね。だけど、わたしが学校に行くときは、少し、かばえるところがあった。“勉強ができれば、いじめられないから”と思って、そっちのほうに気持ちを向けてましたね。

《聞き手》いちおう、先生がよく見てくれると、いじめも、ちょっと収まるっていうことになるのかな？

《Aさん》いや、小学校1年生のときは、わたしがどの程度の能力があるか、わからないじゃないですか。「先生、あの人が叩く、いじめる」とか言うと、「あなたが悪いんじゃないの」というような言葉を聞いて、ぎゃくに涙が出たけど。我慢しとったこともありましたね。でも、小学校の高学年になって、成績が良いと、先生も違う目で見えてくれたのかなっていう気はします。かわいがってくれた気がしますね。でも、姉は成績も悪いし、親がそこにおいて、「あそこの子だぁ」と言われて。

叔父の態度が変化

学校での仲間はずれにまして、Aさんにとって辛かったのは、やさしかった叔父が彼女を「厄介者」扱いしはじめたことだ。そうなるには、まず、叔父自身が世間の偏見にさらされて、Aさんの母親への「恨み」の気持ちをもつようになっていたことがあろう。

《Aさん》じいちゃんが亡くなって、叔父は、早く結婚しなきゃならなくなったんですね。だからまあ、“嫁を、嫁を”“早く結婚したほうがいい”なんて話があるときに、「うちみたいなのに、嫁が来るか」というのが、だんだん、叔父の不満として、わたしのところにも聞かれるようになったんですね。

そして、誰かが、それなりの人を世話してくれて、結婚するんです。子どもができませんわね。もちろん愛情はなくなっていきますよね、わたしから。ほんとに、わたしを肩車して、いっしょにお風呂入って、囲炉裏端で抱いて、そして、昼寝してたら、わたしが寝てるそのそばから、団扇をあおいでくれてた叔父なんです。

だんだんその、自分の家は貧しいし、嫁は来てくれないかしらない。そして、ときどき外に出て、いろいろ会合に行ったときに、やっぱり、偏見差別の煽りを受けとったんでしょうね。叔父が、「くっそう、馬鹿にされて……」とかいう言葉を、口にしてました。わたしは、自分が大好きな叔父なもんだから、かわいそうでたまらんかったですけど。やっぱり、子どもができたときに、「親のことは話してくれるな」という、叔父の〔気持ちを〕わたしもなんとなく感じ取ってました。“もう二度と帰ってきてくれるな。父ちゃん母ちゃんには、二度と帰ってきてくれるなよ”とかいう、叔父の、心の変わりがあったんですよ。それがもう、だんだんだんだん、やりきれなくて。それでなくても、もう、遠慮するようになってるんです、叔父にたいして。わたしは厄介者だっていう気持ち。

「生まれないでよかった」と親をなじる姉

Aさんの姉は、Aさん以上につらい人生をおくったようだ。

《Aさん》姉は、ほんとに、つらい時代を送ったみたいですよ。姉は〔昭和〕10年に生まれて、〔母は最初、昭和〕13年に〔敬愛園に〕入ってるから、ほんとに姉も、3歳のときに、母親を引き離されてるんですよ。わたしは、「行かんでえ、行かんでえ」って追えたけど、姉は追うこともできなかったんだなって、思うんです。

母親が帰ってきたときには、けっきょく、わたしが生まれるでしょ。父と母は、わたしだけに愛情がある。だから、姉はもう、叔父さんたちを「あんちゃん」、ばあちゃんを「お母さん」って言って、育てていくわけだから。ほんとに卑屈に育っていききましたよ。

姉は、中学校卒業してから、岐阜へ集団就職していきました。でも、郷里の人が一緒だったみたいで。集団就職で、おなじ紡績とか、勤めるじゃないですか。けっきょくバレてしまって。職場も追われましたね、姉は。

帰ってきてから、姉は、敬愛園にいりびたるんです。そして、母親をいじめるんです。「なんでわたしを産まないかんがったか」って。「こういう親に生まれて、しかも、ふた親も、らい病の子に。生まれんで良かった」って。もう、ずっと母親をなじり続けましたね。

このように語るAさんだが、じつは、自分自身にも、ずっと同じ気持ちがあったという。「“なあって、ふた親とも病気で、わたしを産んだんだ”って、心の中ではですね、そういう心の叫びは、ずっと〔わたしにも〕ありました」。

居場所がない、落ち着かない少女時代

中学生のAさんは、自分の居場所がなく、それゆえに、落ち着かない少女時代をすごしている。

《Aさん》わたしも“黙っとけばいいんだ”って思って、涙をこらえて我慢してるんだけど、自分が勉強することで、ちょっと、いじめとかがなくなって。やっぱり、それののってたんです。

そしたら、中学校になったら、勉強が、やっぱり比重が高くなるじゃないですか。電気〔＝電球〕なんて1つしかないですから。みんな、百姓しよる。だけど、〔わたしは〕勉強がしたいですよ、その〔1つしかない電球の〕下で。「この忙しいのに、おまえが勉強して、なんなるかあ」って、やっぱり、そういうのが飛び交いますよね、どうしても。だから、自分がいる場所が、なくなっただけです。結局、「どうしても、勉強がしたい」。

保育所にでも入りたい」って言って、敬愛園の保育所に入るんです。

《聞き手》いくつで行くの？

《Aさん》中学校1年の終わりごろ。でも、その保育所に、わたしは慣れなかったんです、集団生活が。幼い頃からおる子どもたちってというのは、その生活に慣れてるじゃないですか。そこの保育所が、我がものですよ。それがどうしても馴染めない。新しい人が入ってきたって、勉強してるところに、やって来るんです。もう、邪魔するかのよう

に。
母親にもっと会えると思ってたら、2週間に1回か1ヵ月に1回、もうそのぐらいで。面会も、母親の部屋に行けないんです。公会堂とか行ってましたね、そこに行って。そこで、みんな、集団でなんですよ。そしたら、わたしは、「ここに入ったけど、みんなからいじめられる」とかいうことが、訴えられないんですよ。会っても、会ってる気分ではないし。とうとう、またわたしは、そこ飛び出して、別の施設に行くんです。

《聞き手》それ、いつ移るの？

《Aさん》中学2年生の、2学期ぐらいから。「愛の聖母園」っていうところがあって。そこは女の子だけいるところ。カトリックの。

《聞き手》これは、どういうかたちで行けたの？

《Aさん》それは、敬愛園から〔頼んで〕入れてもらったんです。そこでも、やっぱりこう、あんまり……。とにかくわたしは、落ち着かないんですよ。ほんっと、自殺したいと思いましたね、その頃ずうっと。なんか、自分の居場所、自分の“こうしたい”って思ってた夢が、なくなって。落ち着かなくて。父や母にも心配をかけましたね。子どものときに、「この子は利口な子だ、利口な子だ」って、親は自慢してたと思うんです。それが、迷惑ばかりかけて、もう、とんでもない少女になってたと思うんです。

そんな状態のときに、最後は、中学3年の3学期に、姉のところに行くんです。姉が、ちょうど同棲してたから。そこに転がりこんで行くんです。姉はですね、母をいじめる反面、寂しくて、誰かを、やっぱり求めてたんですよ。わたしが行くところに寄って来るんです。きょうだい喧嘩して、わたしをいじめるんですよ。でも、姉は寂しさの強い人で、わたしのそばに来た。わたしもちょうどよかったですね、聖母園にもあんまりいたくないときで。それと、就職とか考えてたから、ちょっとだけ、姉と一緒に暮らすんです。3ヵ月ぐらい。

愛生園の看護学校を受験 「隠さなきゃいけない」

希望を失いかけていたAさんだが、敬愛園の「おにいちゃん」の勧めで、長島愛生園の看護学校に進学という進路を見出す。しかし、病気の両親のことを「隠さなければいけない」という気持ちは、どんどん強まっていく。

《Aさん》そういうところで、ちょうど、愛生園の、新良田高校ができることになって。

その時代はまだ、患者が患者を見る時代です。父は、弱視ぐらいのときまでは、けっこう他人（ひと）の世話をしてました。食事を運んだりしてるのは、父でしたもん。だけど、いよいよ失明したときに、父と母の世話をする人がまた、沖縄の人だったんです。その人が、とっても優秀な人で。わたしも「おにいちゃん」って言ってたんです。その人が、新良田高校に行くんですよ。そして、わたしたちのことを、やっぱり気にかけてくれていたみたいで。「Aちゃんを、こっちの看護学校にやらないか」っていう、アドバイスをもらったんです。「おにいちゃんが、こうやって言ってきてるけど、おまえどうするか？」「そこに行く」って。なんか、そこで守られそうな気がしたんですね。それで、いままで落ち着かなかった少女が、少し、希望が湧いたんです。“看護婦になろう”って。それで、愛生園の看護学校に行くんです。

このときの受験に行くのは、敬愛園の保母さんがついて行ってくれた。だから、わたしは、敬愛園〔の未感染児童保育所〕に籍があったんじゃないかと思うんですよ、そのあいだ。とっても素敵な保母さんがついて行くんです。それで目についたのかなんなのかわからんけど、「誰と来ましたか？」って聞かれると、もうそれをごまかすのに苦労するんです、いきなり。「一緒について、引率してくれた人は誰ですか？」って。敬愛園の保母さんって、よう言わないんですよ。

《聞き手》長島愛生園の看護学校でしょ？ それでも、隠さなきゃいけないと思った？
《Aさん》隠したほうがいいだろう〔とか〕、いろんな噂が飛び交ったり〔した〕。父と母は、もう、わたしを守りたいばかりだから、いろんな噂を鵜呑みにするわけです。「ここの病舎の子どもって、言わないほうがいいみたいだ」とかいうから、そうかしらって思って。もういろんな、悩んでるところに、「誰と来たんですか？」「あの、ちょっと、よその保母さんです」って言うだけで、敬愛園の保母さんって、言わなかったです。面接のときも、やっぱり、だから、怯えてましたね。

合格発表は、そのにいちゃんから「よかったね、合格してる」って連絡があるんですけど。わたしには、合格通知が来ないんですよ。そしたら、それは迷子になって。結局、敬愛園に合格通知は行って。敬愛園の、入所者の子どもっていうのはバテしてしまうんです、愛生園では。〔看護学校に〕入ったら、やっぱり職員も一緒なんです。「あの子はねえ、あそこの入所者の子どもだって」って、もうそれが、ずうっと広まって。またそこに、暗く沈む。そこで、わたしは入学するんだけど、沈んでしまうんです。“わたしはそう思われてる、そう思われてる。島の中でそう思われてる”。

わたしは、宗教に入り込んでいくんですよ。もう、わけがわからないんですよ、自分の、心の落ち着きがなくて。そして、あの……、ある牧師さんと知り合って。その牧師さんは、健康な人と結婚されてて、園の中におられたんです。そこに、わたしは、隠れて。学生の身でありながら、入り込んでいくんですよ。

そしたらある日曜日、そこに、当直の婦長が回ってきたんです。ジロツと見られた。“わたし、退学になる”と思ったんですよ。そしたら、その婦長さんが、「あんた来(き)

いや、うちの部屋に」って。「これ飲みや、食べや」って言うんですよ。でも、もう怖くて怖くて。そしたら将来の話をしてくれて。もうそのときは2年生だったんですけどね、実習にもおりにたし。「あんたはな、ここの病院には勤めんな。よそのところの看護婦になりい。そのほうが、きっとあんたは、思い切り働ける」っていうアドバイスをくれて。また、“はっ、社会の病院で働こう”って。卒業するまで、その婦長さんは、ずっとかわいがってくれるんです。

姉の恋人に打ち明ける

隠すことを一種の戒めとして守ってきたAさんだが、隠したままでは生きていけないと判断せざるをえないときがある。とくに、結婚の問題では、隠し通せない。のちにAさん自身も自分の結婚相手に「打ち明ける」が、同棲する姉にも、彼氏に打ち明けることをAさんは迫っている。

《Aさん》姉のところ3ヵ月転がり込んで、姉が同棲してるときに。姉はずっと、親のところに行って、言いがかりばかりつけてたんです。なんか努力して、バスガイドとかになって帰ってきたみたいですが、とにかく、荒々しい性格でした。“こんなに落ち着かないのは、結婚しないからじゃないだろうか”“結婚したら、結婚したら”って、みんなが、まあ24、5歳になってたから、言ってたんです。岐阜におるときも、やっぱり恋愛はしてたみたいですね。でも結局、親のことを話さなくて、去って、帰ってきた。もう、心の中は、“親のせいで、親のせいで”っていうのが、いっぱいになってるから。ちょっとやそつとでは許せなかったけど、やっぱり、同棲生活していくんですけど。

わたしが、「やっぱ姉ちゃん、話そうよ」って。「このまま、わたしたちは、黙って生きてゆかれないよ」って言って。ふたりで、姉の夫になる人に、話すんです。ここも、やっぱりおなじ、「コシキか」っていう、激しい言葉が返ってきました。それでまた、ごまかそうと姉はしてた。「ごまかしたら、ずっと一生、ごまかしかんといかんよ、姉ちゃん。ごまかすまい」って言って。ふたり、泣き泣き、姉の夫に話すんです。「俺はいいけど。俺の親には、絶対、言ってくれるな」っていうことで。まあ、義兄(あに)は、1回結婚も失敗してましたので、姉と結婚したいっていう気持ちになってたんでしょう、そういう条件があったとしても。子どもをもって、子どもを捨てて、姉と結ばれた人やったから。まあ、姉も、そういう人生を歩いた人だったから、“この人ならば”っていう気持ちがあったんでしょうね。

その人と、母のところ会いにいくんです。そりゃあ、やっぱり、座ろうともしなかったですよ、最初は。もちろんお茶も飲まなくて、そそくさと帰りました。それが、ずっと続きましたがね。まあ、ほんつとに、父と母は耐えて。その夫婦に、よくしてやってきました。あとになって、年金が2人分出るようになったときには、“どうかしたら

姉の気持ちが落ち着くんじゃないだろうか”ってというのが、いっぱいあったんでしょうね。“わがままな姉に添い遂げてくれる人なら”ってことで、家まで建ててやってきましたよ。〔母親は〕「ときどき、父ちゃんと話すんだよ。おまえは、金の心配はかけないけど、会いに来てくれない。姉ちゃんは、よく会いに来てくれるけど、金の心配と、わたしと喧嘩して帰る。父ちゃん、つらそうだよ」って話は、してましたね。

そういう人生を送りながら、やっと姉は、子どもができるんです。わたしの子どもより小さいんです。できた頃から、まあ、義兄(あに)もわりと、わかってくれて。母のところにもよく行くような人生を送りだしたのは、もう、父が死んでからなんですけど。けっきょく姉は、もう、どっしても過食症がとまらなくて、糖尿病になって、54歳で死にます。子どもは2人、産むんです。わたしはその、姉がわたしのところに近づき、わたしも姉のところに寄ってくる反面、もう、姉には疲れ果ててました。父と母に言う言葉がつかなくて。でも、自分が、ツバを吐きかけられて、こんな人生を送ったっていうことだけは、やっぱり、姉も話しませんでしたわ。わたしまででしたね、その話は。

「あなた、看護学校どこ卒業したの？」

病院に勤めはじめれば、先輩の看護婦から、「あなた、看護学校どこ卒業したの？」と尋ねられる。普通なら、「愛生園の看護学校」と答えることに、とくに抵抗があるわけではない。しかし、ハンセン病の両親をもつAさんにとっては、それが「最初のひっかかり」となったという。

《Aさん》わたしはその、「社会に出なさい」という婦長のアドバイスもあって、〔公立の大病院で〕ことしの3月まで働くんです。もう、そのときに、自分がとにかく、父や母のことについて語らなければ、自分のまわりは平穏で幸せなんだっていうのが、十分わかってたから。“親を語るまい”っていう決心のもとに、働くんですね。でも、最初に言われた先輩の言葉が、「あなた、看護学校どこ卒業したの？」って。ふつう聞きますよね、やっぱり。つい出てしまったんです、「愛生園の看護学校」。〔先輩は〕「あなたにはもう〔病気が〕うつっちゃうよ」と。びっくりしましたねえ。これが、〔たんに〕そこ〔＝愛生園の看護学校〕を出ただけの人だったら、「そんなに簡単にうつるもんじゃないよ」って言えたでしょうけど、それが言えないんですね。「どこの卒業？」っていうのが、最初のひっかかりでした。

父や母に会いに行くと、父が言うんですよ。「父ちゃん母ちゃんのこと、なんも考えなくていいよ。自分の幸せだけ考えて生きていきな」って。子どもの頃、母は、「あなたを父ちゃんの籍に入れなかったのは、不憫だから。両親〔とが〕この病気では不憫だから、わたしの私生児にしとった。ほんつとに、この人が父ちゃんだからね。父ちゃんは健康な人だったからね」っていうことも、聞いてたんですよ。でも、複雑でしたね。“そげんに言われても、病気だよな”って。そういう気持ちをしながら。

でも、ほんとにわたしは、父と母の愛情を受けながら生きてきたから。やっぱり、なんかこう、悪い方向に進みきれないんです。なんとか、この親を、幸せな気分にしたいうちゅう気持ちもあるわけですね。

結婚差別

Aさんは19歳のときに、プロポーズされる。しかし、両親のことを打ち明けたとたん、きわめて偏見にみちた言葉が返ってきた。

《Aさん》19歳のときに、恋人が現れたので。「結婚を、結婚を」って言うから、“まだ、ちょっと早いかな”と思いながらも、“もしか”と思って、〔両親のことを〕手紙に書き送ったんです。〔そうしたら〕「あなたの体を介して、らいになるんじゃないか」っていう〔返事〕。

もうそれは、怯えましたね。〔わたし自身は〕“両親、ハンセン病の親から、わたしは生まれてる。〔それでも〕こんなに健康に生きてるんだ。そんなに〔簡単に〕病気になるものではない”って思っている、世間はこんなふうに見てたのかっていう、驚きですね。それは怖かったです。その人が言い触らすんじゃないかって、そのほうが怖かったです、別れても。おんなじところにおいて、自分は公立病院っていうところから、逃げたくないでしょう。だんだん、わたしが就職する頃には、公立病院は准看護婦を採らない時期でしたから。どうしても自分は、ここにおらないかん、という気持ちもあつたし。怖かったですねえ。

“わかってくれる”男性と思い結婚、しかし……

21歳のとき、恋人に両親のことを打ち明ける。こんどは「そんなこと関係ないよ」という、“理解ありげな”言葉が返ってきた。そして、結婚。しかし、「自分の親には話してくれるな」と言われ、“両親は死んだ”ことにした。療養所の両親のことを同居の姑に隠しながらの生活は、終わりなき苦渋の毎日であった。

《Aさん》〔そして〕失恋の心を癒してくれる男性に惹かれてしまうんです。“話せない”って思ったけど、やっぱり、姉のときの悲しみもあったから。どうしても、隠して生きることはできない。“親が死んだとき、どうするんだ”って、そういうのがあったから、“やっぱり話そう”と思って。21歳のときに話すんです。そしたら、「そんなこと関係ないよ」って。さも理解があるげでしょう。そして、親のところに行くんですね。

行ってやっぱり、びっくりするんですよ。「びっくりしたでしょう?」「びっくりしない」って言いながら、やっぱり、びっくりしてるんですよ。〔そして〕「〔自分の〕親には話してくれるな」って。

「親には話してくれるな」って言うってても、子どもができて、子どもに〔も〕話せな

いんですよね。子どもに話したら、ばあちゃん〔＝義母〕に話すんじゃないかという不安があるから。そして、なんとなくチクリチクリとするもんがあるんですよ、夫とのあいだに。子どもは湿疹つくりますよね、どうしても。そういうとき、「俺の家系は、こんな皮膚の弱い家系じゃない」って言う。

わたしが結婚相手に選んだのは、“ちょっとぐらい体が弱いほうが、わかってくれるかもしれない”って。入ってきた喘息の患者さん、わざわざ、“この人を選ぼう”と。でも、それはだめでしたねえ。借金をよく作ってました。喘息なのに、よく賭け事をしてました。賭け事するのは、自分では「出世のためだ」って言ってたから、わたし、黙ってました。「付き合いがあるんだ」って。でも、それって借金ですよ。

《聞き手》賭け事って、麻雀やるわけ？ レートが高いかたちで？

《Aさん》はい。それに苦労をかけられました。でも、耐えました。っていうのは、姑が優しい人だったんです。とっても優しい人。自分の息子のそういう生き方を、嫌いでした。だから、わたしを、ものすごくかばった。結婚するときに、「父も母もいない」って〔言ったので〕、「親のいない人だから、かわいがらなきゃならない」って。

《聞き手》親は死んだことにしたの？

《Aさん》はい。それで隠しておしました。夫だけに言って、隠したんです、ずっと。

姉が過食症で、糖尿になって。姉が病気だったのは、わたしにとって、都合がいい面があったんです。べつに〔容態は〕悪くはないんです。〔でも〕いつも「姉が病気」って言うていけば、〔親を見舞うのに〕都合がいいでしょ。これが医療従事者の、うまい嘘ですよ、って自分で思いながら。

《聞き手》そうやって、療養所のご両親に会いに行った？

《Aさん》はい。姉を危篤にするんです。すべて「姉は危篤だ」って。「どうしてそんなに？」って〔聞かれたら〕、「低血糖に陥るの。だから意識もなくなる」って。

《聞き手》そうか。看護婦が言うんだからね、もっともらしいよね？

《Aさん》はい。よく嘘言いました、ほんつとに。職場にも「親はいない」って言ってたから、ずっと。あとで生きだせる〔＝生き返らせる〕んですよ、それ。〔母親の〕晩年に。それもまたうまい（笑）。

履歴を書き換えるために夜学に通う

「愛生園の看護学校卒業」という履歴を書き換えるために、Aさんは、33歳から、正看護婦の資格取得のために夜学に通う。

《Aさん》もう舅は亡くなってました。姑だけ。その姑が優しくて、理解のある姑で。三交替〔勤務〕するわたしをかばってくれる。

わたしは准看護婦でいて、自分の、「愛生園卒業」っていう履歴をもって生きていくのも、やっぱりどこかで、ずっと嫌だったんですよ。〔しかし、正看護婦の資格取得の

ための〕進学コースに、〔勤めを〕辞めていくわけいかない、家庭もってるから。夜学のできるのを待って、33歳から夜学に入るんです。そのときも姑が、すっごく助けてくれるんですよ。思い切り勉強もできたし。

《聞き手》夜学だと、何年やるの？

《Aさん》3年です。幸い、子どもを、ものわりのいい子どもに育てたので、「お母さん、勉強がしたい。もっと人の役に立つ人間になりたい。だから、夜学に行ってい？」
「行ってほしくないけど、お母さんが行きたいなら、いい」って。3年間我慢してくれたので。

そのかん、やっぱり夫は麻雀に走って。“この2人の男の子を、間違っただに走らせないために、どうしようか”って思ったら、短い時間を……。夜学から9時半10時に帰っても、「きょうは学校どうだった？」お腹をすかせながらも、話を聞くとか。そういうところで、子どもを卑屈にならないようにしていく。3年生になったら、昼間に実習して、夜は仕事。16時間仕事をする。そして実習録を書いたら、朝の6時になる。それから2時間寝て、8時からまた実習におりる。そういう生活を1年送りました。ある日、子どもの作文を見たら、「ぼくのお母さんは、寝てる時よりも勉強してる時のほうが長い。ぼくも、もっともっと勉強しよう」と書いてくれた。 “ああ、わたしのやってることは、間違いなかった”とって。3年間、病気もしなくて、子どもたちも病気しなくて。まずひとつ、夜学っていうのを突破して、履歴を書き換えることができたんです。

優しい姑もハンセン病には強い偏見

愛生園の婦長が定年退職をむかえ、Aさんの住む市に越してくるというので、挨拶の葉書が届いた。そこには、「らい療養所」の文字が書かれていた。それを見た姑は、異常なまでの反応を示した。Aさんは、「やさしい姑」の心のなかに「ハンセン病への根強い偏見」が同居している悲しい事実直面してしまったのだ。

《Aさん》愛生園の、もう一人の婦長から〔葉書がきた〕。〔わたしの住む〕市に、定年退職〔してから〕、お姉さんと暮らそうと思われたんですね。なんもわたしに、準備に2年間おった生徒にですよ、わざわざ葉書をくれることないですよ。市に住むから、まあ、お付き合いしたいと思ったんでしょうね。「わたしの、らい療養所での何十年間は貴重なものでした」という葉書が来たんです。そしたら姑が、その葉書を見て、震わせて、「あんたは、こんなところにおったんかぁ」って震わせましたね。“この優しい姑も、ハンセン病にたいしてだけはダメなのか。やっぱり話せない”。

ほんつとに、話そうと思いましたがよ、わたしをかばってくれるのは、この人しかいなかったんですから。孫もしっかりと育ててくれたんですから。もの知りな姑で、孫に、集合を教えよったですよ、数学の。百人一首はみんな覚えてました。どこからでも読ん

でしたね。百人一首、わたしは全然取らないんです(笑)。そういう姑だったから、「きょうは、こんなんで仕事が遅くなった」って、いろいろ、わたしも帰ってしよったんですわ。

母たちには、「姑さんが優しいから、辛抱してね」って。〔両親は、なかなか〕わたしに会えないことも辛抱してくれてたんです。だって、出産とかそういうところでも、姑に頼らんと仕方がないじゃないですか。洗濯からなにから、してくれるわけですから。親がいないと思って。でも、親が年取ってくると、話したくって。“どうするんだ、どうするんだ”という気持ちがあったから、〔姑に〕話そうかな、と思ったけど、その一通の葉書で、やめました、話すの。

前出の語りのなかで、敬愛園の母親が「おまえは、金の心配はかけないけど、会いに来てくれない。姉ちゃんは、よく会いに来てくれるけど、金の心配と、喧嘩して帰る」と言ったという表現があったけれども、Aさんは、敬愛園の両親に会いたくなかったわけではなく、会いたいけれども、姑に内緒にしているかぎり、めったに会いに行けなかったのだという事情が、上の語りで明らかになっている。

父の死に自分を責めながら生きて

星塚敬愛園での父の死の場面は、Aさんにとって、一生、悔いと責めを残すものとなった。姑に嘘をいって、敬愛園の危篤の父のもとに駆けつけてきたAさんは、「もう〔死んでも〕いいがな」という言葉を口にしてしまったのだ。Aさんが34、5歳のときのことだ。

《Aさん》そして、父の危篤があるんです。姉をやっぱり危篤にして、〔敬愛園に〕来ました。胃潰瘍だったんです。吐血したんです。姉は来て母親と喧嘩する、そしてわたしは来ない、というのが父の寂しさとなって、やっぱり心の中ではつのがつってたんだと思うんです。ものすごい血を吐いたそうです。そこへわたしが行ったら、父親は「帰れ、帰れ」って言ったんです。それっきりでした。

そのときに、わたしは、「もう、いいがな」って言ってしまったんですよ。“死んでもいいがな”なんですよ。もう、疲れ果ててたんですよ、そういう人生が。で、父を犠牲にしたと思って。いまでも、わたしは、父を殺したのはわたしだと思ってる。そこがいちばん、悲しい場面でしたね。

だんだん意識が遠くなっていくのに、わたしは敬愛園の医者に、「もうこれ以上のことを処置しないでください。わたしは姑に嘘を言ってここに来てるから、何度も駆けつけることができない。だから、助からないんだったら、わたしの目の前で死なしてください」。父は、わたしのために、そこで死にました。わたしは医療従事者なのに、なんで「父を助けてください。点滴をもっといっばいしてください」って、なぜ言えなかったのか。助ける道もあったんじゃないかって。それからずっと、わたしは、責めです。

もう一生、背負って生きるでしょう、このことは。

そして父の葬儀が終わったら、ほんっとに、なに食わぬ顔で、家に帰って。「姉さん、低血糖起こしたけど、助かった」。また、なにがあるかわからんから、姉には生きとってもらわんといかんとですよ、喧嘩はしても。だから、そうやってまた、すましてましたけども。悲しくて悲しくて。ずっと泣いて暮らしました。

《聞き手》お父さん、いつ亡くされました？

《Aさん》昭和54年だったと思うんです。53年だったかもしれない。そのあと、姉が死ぬんですよ。

母を大事にするために離婚を選ぶ

父親の死に際して悔恨を残したAさんは、母親を大事にするために、離婚の道を選択する。15歳の息子に打ち明けたところ、息子も離婚に賛成。夫が博打で借金をつくったことが、離婚の表向きの理由になった。長男が1968（昭和43）年生まれだということから、Aさんが離婚したのは40歳前後ということになる。

《Aさん》とにかくもう、父が死んでから“離婚しよう”っていう気持ちで、だんだん、つよってきた。やっぱり博打を打つ人は、借金を抱えるんです。“このときに離婚っていうことを言わないと”と思って。父が死んで、悲しさと、いろんなことが入り混じってたので。

子どもに「じつは、こんな親がいるんだ」って言ったら、「なんであんたは、この家にだけ尽くしてきたんだ」っていうのが、15歳の息子の、わたしにたいする怒（おこ）りでした。それがまた、わたしを力づけてくれたんでしょう。「離婚しなさい」って〔息子は言った〕。

でも姑は、わたしが好きなんです、離れたくないんです。わたしは姑に、冷たく、冷たく当たりだして。「わたしは、あの人には愛情はない」「もう元には戻れない。あの借金で、戻れない」って、ずっと言い続ける。実際は借金は、わたしが背負って、整理してるんです。でも、そうやって言い続けて。離婚までもっていきました。

《聞き手》いくらぐらい、借金つくったの？

《Aさん》1千万〔円〕ぐらい、あったんじゃないですか。その金額が大きかったから、離婚へもっていった。姑も裏切れた。「借金と子どもはわたしがみる」って言って。それからわたし一人で、高校、大学って、〔2人の〕子どもを出しました。

夫が出て行くよりも、姑が出て行くほうが悲しくて。わたしは一日、ふとんの上で、どうやって生きていっていいかわからなくて。だから、どっちにも罪をつくったような気がします。親にも罪をつくり、姑にも罪をつくりしながら。でも、そうでなければ、わたしは、残ってる母を大事にできないと思ったんです。父親の死があまりにも悲しかった、わたしが殺したんですからね。

《聞き手》長男の子には、15歳、中学3年のときに教えて。おばあちゃんのところに、連れてくわけ？

《Aさん》はい、行きます。父親は死んでいないから、父親に会うことはなかったんですけど。「もっと早く会いたかったよ。ばあちゃんは酷くないじゃないか」って。ほんとに、眉毛がないわけでもなし、顔が崩れてるわけでもない。〔母の病気は〕おそらく自然治癒してただろうと思います。っていうのは、手だけがひどいけど……、指はなくなっていましたよ。それはもう、百姓して。ここに入ってから強制労働して。包帯巻きとかですね、指がなくても。「あんたのお母さんは器用だった。あれでも、包帯巻き、あたしたちと一緒にしてた」って。この裁判で、いろんな人たちが、わたしに、母の記憶、父の記憶って、教えてくれるんです。

《聞き手》自然治癒っていうのは？

《Aさん》再収容されたときに、菌の検査があったんでしょうね。〔父も母も〕「もう菌はなかった」と言っていました。

姉の死

Aさんの姉は、1989年に、54歳で亡くなった。Aさんが45歳のときのことだ。Aさんの語りからは、姉の死にざまは、ハンセン病問題に翻弄されつづけた無念の死であったように窺われる。

《Aさん》〔父が亡くなって〕母は一人になって。家に姑といると、電話もかけられないんです。聞いてるんじゃないかと思って。離婚してからは、電話かけて、もうほんとに、大声で話しましたねえ、ふたりで。敬愛園に行っても、ふたりで過ごして。あの、あんまり心配かけなくなったら、呆けが早くなったんですけど。

園の人は、だれの娘っていうことで、「あんた、妹のほうだね」ってわかるけど。姉のあの、やかましい。こんなに太って、母をいじめる姉だけを、みんな園の人は知っているんです。「ちゃんか？」っていうから、「じゃない。わたしは妹のほうだよ」って。「ちゃんは、かあちゃんをいじめてばかりしよった」って、有名でした。

その姉は、だんだん病気が酷くなって、けっきょく、夫のもとから離れていきます、自分から。そして生活保護を受けて、最期を迎えるんです。ほんと、2人の子どもたちが可哀想でしたがねえ。「あんたは、自分が受けた悲しさがあるんだったら、もっと健康にして、2人の子どもをちゃんとせんといかんじゃない」って言うたら、もう、いっぱい〔言葉が〕返ってきよった。もうわたしも、あんまり、姉のところになんか近づかなくなっていました。姉が、病院でいよいよ、体が腫れたりしたときに、顔見に行く。〔姉の子どもたちは〕わたしの子よりも小さいですから、「子どもが高校に入ったりするのを見たいだろう。長生きせんねえ」って言ったら、「もう遅いわぁ」って。「わたしは長生きしたくない」っていうのが、姉のホンネでしたもんね。「もう、生きておきたくな

い。いいわ」って言ってました。で、姉が死んでいくんですけど。

まだ母親なんて、〔園から外出するのに〕外出許可〔の制度〕もあって、ほんとに、やっと外出するくらいでした。やっぱり、ちょっと怯えながら母を連れてまわる時代なんです。それだったけど、姉が、呼んだんですよ。〔母の〕外出とおんなじ日に、死にました。わたしは間に合わなかったけど、母だけが間に合ったんです。やっぱり、姉は母を求めてたんだらうって思います。母と、命日まで近くて死んでるんです。否が応でも、2人の命日を一緒にしなきゃならないように、なんか、姉が仕組んだんかなあとかと思いますがね。まあ、ずっとあとで、母は死ぬんですけどね、平成12年に。

母の最期を看取る

母の最期のときには、思う存分、介護の限りを尽してあげた様子が、Aさんの語りから伝わってくる。つぎの語りの「敬愛園のなかでは最高の葬式を」とあわせて、子としての母への愛が惜しみなく表現されていよう。それは、長いこと、周囲の人たちに、ハンセン病の親がいることを知られてはならないという戒めのために、隠しつづけ、嘘をつきつづけてきたAさんの一生を、最後の時点で、悔いの残らぬものに転換するために、欠かすことのできないものだったのだろう。

《Aさん》離婚してからはもう、ほんとに、母を大事にすることができました。平成8年も過ぎた頃、戦争に行ってた〔長男の〕叔父が、「かあちゃん連れて帰れや」って言ってくれたので、田舎に連れて帰りました。正月のたびに、母を連れて5回くらい、帰りましたねえ。とってもうれしそうでした。「寮の人が言うによ。わたしたちのぶんも、幸せ味わってきないって、言うによ」って。けっこうおしゃれでしたので、「わたしの髪はどうや？」 “どうでもいいがな”って言いたかったけど（笑）。家の近くになってから、髪をさばいてやって。正月のたびに、連れて帰りました。それがわたしの、いい思い出でしたね。“母の最期は、ぜったいに悔いのないように”って思ってたから。そうやって、まあまあ、正月のたびには迎えてくれるように、叔父たちがなっていくんですけど。

母が、いつのまにか病魔に襲われてて。ペースメーカー入れてたんですけど、よく合わなくて、まず腎不全になって。駆けつけて、「どうですか？」って言ったら、「見たらわかるでしょ」っていう、医者言葉。ムカツとしましたがねえ。鹿児島大学から来た、若い先生でした。

今泉先生が、よくしてくれました。わたし、ずっとそんなとき、何日か見てたんです。「先生、意識がありますから。見殺しにしたくない」って言うたら、「僕もそう思う。挑戦して、透析しようかと思ってる」「お願いします」って言って。透析で回復したんです。急性腎不全〔でしたけど〕、もう透析もしなくていいぐらいに、回復する。「よかったよかった。母ちゃん、もう病気じゃないんだよ。元気になったんだ」って。

ずうっとそれから、フォローしよったら、「腫瘍マーカーが高い、お母さんは。どこの癌だろうかねえ」って。あの、胆道癌っていうことだったんです。“ああ、ばあちゃんも胆道癌で亡くなったなあ”って。「どうする？」って言うから、「手術するって、そんな野暮なこと言わないでください、この年で。とにかく自然なかたちで」。83歳でしたから。そのときは、〔敬愛園に〕医者がないから、あっちこっち行きました。あの、××国立病院とか、病院とか。

そして最期は、“もう、いよいよだな”と思ったとき、1週間ぐらい〔休みを取りました〕。ずっと職場には嘘を言い続けてるんですけど、ただひとつだけ、言ったのは。「父が沖縄で戦死したもんだから、そのまま母は沖縄にいた。わたしたちだけ、ばあちゃんに育てられていた」。またそこで、嘘を作り出したんです。「母は、姉が死んだときにこっちに帰ってきて、養老院にいた。もういよいよみたいだ」って。「どこの病院に入ると？」〔と聞かれると〕、またそれも嘘言わないとならない。ちょうど××国立病院に入ってるときに、「××国立病院に入ってるの？ あたしの知ってる看護婦がいるんだけど」って〔言われた〕。「うーん」って、もうそこ、ほんっとなんか、綱渡りして。“嘘の綱渡りか、これ”とか、そんなん思いながら、嘘を言いつづけて。ずうっと死なしてた母を、なんとか、生きだせて〔=生き返らせて〕。そんじゃなかったら、最期はしてやれないと思ったから。

夜中の1時2時に夜勤明けたら、朝はもう、7時の電車で飛び乗って。〔敬愛園に〕2週間ごとに行っちゃあ、母を〔病室から〕部屋のところに連れて〔行って〕、母とそばに寝て。体〔の向き〕を変えて、ぜったい床ずれができませんように変えて。そういうことを、ずうっとしよったら、あそこの介護の人たち、こそっと覗いてましたわ。「わたしたちにも、介護の手順を教えてください」って言ったから、わたしはこのときとばかりに、いろんな物を持って行って、したんです。

最期は1週間ぐらい、いっしょにこう、寝て、抱っこして。もうほんとに、この匂いを、この手の冷たさを、ぜったい、自分に、インプットさしとこうと思ったもんだから。もうほんとに、辛かったですけど、きつかったですけど。それがやっぱり、わたしの最後の幸せの、絶頂でしたね、親と子の。「とうちゃんに話せよ。こんなにわたしは〔親を〕大事にする娘になったって話せよ」っていうのが、わたしの願いでした。そのことをずっと言い続けながら。

でも、なんか、わたしが行くと血圧が上がるんですよ。〔そして〕帰ると血圧が下がるんですね（笑）。今泉院長が、「どうしますか。いよいよお母さんが間に合わなかったら」「いいえ、どうしても間に合わせてくれ」。血圧が50ぐらいになったら、看護婦が、わたしに電話かかってくるんです。それから〔駆けつけるまで〕4時間あるから、「娘さんが来るまで待つんだよ」っていうて、足が上げてあるんですよ（笑）。わたしが行ったら、血圧が80になるんですよ。もう、その繰り返し。

〔母の部屋に〕酸素吸入〔の機器〕もそえてくれて。わたしが“部屋で亡くしたい、

わたしの腕の中で死なしたい”っていう気持ちがあったから。やっぱり看護婦だな、これ。血圧が下がると、“酸素せんければ、血圧上がらんかもしれん”なんて、自分でリッターも決めて、酸素してました。2週間ごとに行ったら、「娘さん来たよぉ」っていうことで、最初は車椅子だったけど、だんだんストレッチャーになって、酸素が必要になって。部屋に連れて帰るということをしてくれました。後にも先にも、こういうことをされたハンセン病患者は、いないでしょう。もうそれは、わたしが父を殺したという負い目が、ずっとあったから、そうやって母を送りだしたんです。

敬愛園のなかでは最高の葬式を

《Aさん》姉の子は、わりと「ばあちゃん、ばあちゃん」って〔敬愛園に母に会いに〕来てた。「Aの子よりも、最初から会った姉の子がかわいいがなぁ、孫は」って言うてたらしいですね（笑）。姉は、きっと子どものときに、叩かれながら生きてきたんだろうと思うんですけどね、叔父たちに。やっぱり、子どもを叩くんです、すごい。でも、姉の子どもは卑屈になりませんでした。で、「あんたたちを一生懸命助けてくれたばあちゃんに、最高のこと、してあげようね」って。「敬愛園ではこんな葬式ないよ、きっと。みんな、友達が見送るだけやっちゃ。遺骨もそこにほったらかし。だから、最高の葬式をしてあげよう。あなたは、ばあちゃんとの思い出を書いて、弔辞を読みなさい」って、姉の子に、そういうことをさせて。叔父たちは、〔社会の〕偏見差別がなければ、ほんとは優しい叔父たちだったから、田舎から30人来ました、葬儀に。それも初めてだったみたいです。そんな葬儀をして、送り出すことができたんですけどね。

自分では、やっぱり、まだまだ足りなかった。〔職場の〕病院でも、わたしの親がここに入ってるって言えたら、言える自分の強さがあったらとか、そんな欲を思うんですよ。敬愛園のなかでは最高のことをしてやれたんだろうと思うんだけど、それでもまだ、もの足りなかりょう、親だから。そういう気持ちは、やっぱりありましたね、最後まで。

母が亡くなって。そのためにわたしは、それまで携帯〔電話を〕持たなかったのに、持って。電話をかけたかと思ったら「わたしの母は、何時に亡くなりました」。みんな、職場の人は弔事〔=香典〕を出したいんですよ。それを、パッと電話を切って。ほんっと、いろんなことを計画立てながら、母の死を知らせて。“とにかく1週間休みをもらわないとどうしようもない”と思ったもんだから。帰ったら、「ごめんね、Aさん。斎場聞かなくて。」「いいんだよ。うちはもう、密葬だから」って、そんな嘘を言いながら。“まあ、よく嘘がポンポンでるわあ。嘘つきで生まれてきたわけだから、仕方がないか”と思いながら、嘘を最後までつきとおして。